論文要旨

高齢者におけるインフルエンザワクチンによる神経系疾患のリスク評価

生物統計情報学コース

49-226601

飯田　侑乃

【背景】本邦では予防接種法に基づいて高齢者を対象とするインフルエンザワクチンの定期接種が実施されている。インフルエンザワクチンには様々な副反応の存在が知られており、神経系疾患のリスク上昇も示唆されてきたものの、高齢者を対象に神経系疾患のリスク評価を行なった研究はほとんど存在せず、検討が不十分な状況である。

【目的】大規模医療情報データを用いて、本邦の高齢者におけるインフルエンザワクチン接種と神経系疾患発症の関連を評価する。

【方法】2014 年 4 月 1 日から 2022 年 12 月 31 日の期間における特定自治体の国民健康保険・後期高齢者医療制度のレセプトデータと予防接種データを使用し、自己対照症例研究手法の一つである自己対照ケースシリーズ(self-controlled case series, SCCS)に基づく解析を実施した。当該期間に含まれる加入者のうち、65 歳以上の高齢者かつ観察期間中に少なくとも一度神経系疾患を発症した者を解析対象として同定した。インフルエンザワクチンの接種を曝露とし、アウトカムは入院レセプトの神経系疾患を用いて定義した。観察期間をワクチン接種後 30 日間のリスク期間とそれ以外のベースライン期間に分割し、ベースラインと比較したときのリスク期間におけるアウトカムの発生率比を、標準 SCCS モデルに基づいて算出した。時間依存性共変量として、年齢と季節に関する区間を設定して調整した。

【結果】適格条件に基づき、神経系疾患に基づくアウトカムを発症した 2,929 人を解析対象者として抽出した。この集団において、年齢効果と季節効果の調整を行った場合のリスク

期間におけるアウトカム発生率比は 1.04（95%信頼区間 0.90 – 1.20）であった。てんかんのみまたはてんかん以外に限定してアウトカムを特定した場合の解析においても同様の結果が得られた。

【結論】高齢者におけるインフルエンザワクチンによる神経系疾患発症の明らかなリスク上昇は認められなかった。本研究は特定自治体のデータに基づくことから、インフルエンザワクチンによる神経系疾患のリスク評価に関しては今後も更なる検討が必要である。